



わたしの聖戦

ジハード

女性が働くということ
医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

(127)

アンジーの選択

「乳房切除」の言葉がこれほどメディアに流れたことはかつてなかつたのではないだろうか。

アンジェリーナ・ジョリーが、遺伝子検査の結果、乳がんのリスクが高いことがわかり、がんになる前に予防的に乳房の切除術を受けたニュースは世界中に衝撃を与えた。

アンジーだからこれほど騒がれているが、実はこのような「予防的手術」は10年以上前からしばしば話題になっていた。私は、当時イギリスの民間の保険会社がそれを認め支払う対象とするかどうかの論争を通じてそのよ

つたのだが、予防的な手術は日本の文化にはすぐわいなという印象を持つことを覚えている。案の定、日本では遺伝子検査はほとんど進まず、世界から遅れないと批判され続けてきたのだ。

職業上の関心から、私もアンジーと同様の遺伝子検査を受けていた。2001年のことだ。私がRCA1」と「BRCA2」があり、血液検査で判明する。採取された検体はアメリカに送られ、結果が分かったのは採血から1ヶ月経ったころであつた。

体験とはいっても、検査は

うに検査結果を聞かされるときの緊張感は、いわば「二度と嫌」なもの。もしポジティブの結果だったら、もしすぐに治療が必要といわれたら、もし余命を宣告されたら、と何故だか悪い想像ばかりが頭の中をよぎるのだ。

しかし、私はその検査から8年後、左乳房のがんだけ除去し、なるべく乳房の形を残そうとする温存手術後、1年も経たないうちに再発し、今度は全摘出手術を受ける。さらに半年後にインプラントによる再建手術に臨んだ。私のインプラントはアメリカ製だから、もしかしたらアンジーと同じものが左胸に入っているのかもしれない。

それにして、もつと驚いたのは、技術はあってもそれをこれまで生かしてこなかつた日本が、今回の報道を受けて、急速国内でも取り入れる動きが加速化したこと。すでに2病院が手を挙げている。いやはや、相変わらず外圧に弱いニッポン、アンジェリーナ・ジョリー、恐るべし、である。



たとえ単なるリスクをみるだけ、とはいえて遺伝子検査陽性の結果は本人にとっては重い。母親のがん闘病も見てきたからこそ、アンジーは切除に踏み切つたのだろう。彼女の選択は、それはそれで評価に値するのだと思

う。来ではないがんのほうが多いこともわかつていていたから。検査の結果が間違つていたわけではないのだから、それはそれと受け止めることができたのだ。